

喜界島のユタ、カミオガミの成巫過程

——宗教的解釈の受容と利用——

森 雅 文

目次

はじめに

一、概 況

二、成巫過程の展開

1 心身の不調と病者をめぐる行動

2 宗教世界との接触

三、成巫後の状況

1 その後の病状

2 異能者としてのユタ

四、結 論

おわりに

はじめに

従来の奄美のユタ信仰研究の多くは、シャーマンとしてのユタに議論が限定されてきた。しかし職能者になるために入信する者はなく、その後地域の中で対社会的な役割を果たすことなく日常生活を送る者の方が数多い。ユタ信仰の実態的な側面を見るためには、こうした非職能者にも視野を拡大する必要がある。

ところでユタ達に入信理由を尋ねると決まって、病気にあって仕方なく神様をいただいたと答える。かれらの病気（心身の不調）は神からの召命のシラセで、自分をオサエた神を守護神として一生涯拝み続けるカミノミチ（信仰の世界）に就くことを要求されたため従ったという。個人差

はあるが、各々がこのような共通の認識を抱えている。本稿では、心身の不調を抱えた病者がこのような説明をどのように受け入れ利用するかを、喜界島の事例から考察し、てゆく。

なお喜界では、これらの人々は職能者・非職能者の区別なく「神をいただいている人、神がついている人」とされ、カミオガミとも呼ばれる。そしてこの中で人々の依頼に応じて卜占・祈禱・病氣治療などを行う職能者をカミサマ・イキ（生き）ガミサマと呼び、口寄せ（マブリワアシ）も行うユタガミ・フドゥンと、これをしてないエキ（易）ガミに大別している。非職能者の特定名称はないが、対社会的な役割を負わぬことをウチシンコウすると表現している。むしろ実際はこれらの類別も厳格ではなく、この他の宗教職能者をユタガミ、非職能者をカミサマ・ユタガミと呼んだりもする。かれらには呼称上の分類よりも守護神の獲得という社会的事実が、一般の人々には専門家の種類よりも各自の問題に有効な解決が齎されることが重要なのである。ただし便宜上本稿では職能者にユタ、非職能者にカミオガミの名称を当ててゆく。

一、概 況

喜界島は奄美群島の東北端、奄美大島本島の東二五kmの洋上に位置する面積五五・七平方kmの低平な隆起サンゴの小島である。島内には三三の集落があり一九八五年現在の人口は一〇、六四一人、世帯数は三、七五〇戸で、過疎化に伴う人口の減少が著しく世帯規模は縮小傾向にあり、老人単身世帯の増加など高齢化も進んでいる。

さて一九八三～一九八六年に喜界で一〇名のユタと一五名のカミオガミを確認した。ただし特別視されることを恐れて神をいただいたことを隠そうとする傾向が強く、カミオガミについては日常顔見知りの人でさえその人物の宗教的性格について知らぬことも多い。この一五名は相互関係の追跡から抽出したが、これと関係を持たぬ他島のユタや死亡したユタの指導を受けた者を探すことは困難であり、これは必ずしも確定した実数ではない。なお二五名中事例八を除く二四名が女性である。

また全てのユタが活発に活動しているのではなく、比較的頻繁に客が訪れているのは三名（事例三・四・六）にすぎない。高齢化して殆どしなくなった者（事例一・二）や

断り切れないときだけ依頼を受けるという消極的な者（事例七・八・一〇）もある。事例一二・一八は過去に依頼を受けていた時期があり、事例一五も僅かだが親しい人のために祈禱をしたことがあると述べている。ここでのユタとカミオガミの区分はあくまでも現在、不特定多数の依頼者の相談に応じうるかを基準としている。

なお本稿では聞き取りによる各自の生活史を一次資料としたが、各々の面接が一樣でないために記録の詳細さには差もある。これについては今後の課題として漸次に補ってゆきたい。

二、成巫過程の展開

1 心身の不調と病者をめぐる行動

かれらが入巫の契機とした心身の不調には発熱のような客観的測定が可能な症状や短期間の急性的症状は少なく、長期間の断続的・慢性的な症状が多い（表1）。働いているとおかしくなる、日によって患部や症状が変わるというように症状は必ずしも一定していない。この中では水や茶、漬物だけで数週間も過ごしたり（事例一・二・三・四・七・一二・一七・一八）、生米を三粒も食べると腹が膨れた

（事例一）など、多少の誇張はあるにせよ殆どが長期の食欲不振を訴え、入巫直前には衰弱しきって骨と皮だけになるまで痩せ細るというような極限状態に置かれたという。さらにこの頃は不眠や不思議な夢が続き、独り言が増え、何事にも気が落ち着かない、人に会うと泣けてきたなどとしている。医療施設を訪れても回復せず、衰弱や心身の不調が著しくなった頃には死への恐怖心や強い孤独感・疎外感を訴える者も多く、かれらの抱えた不調が総じて心身相関的なものだとは推察される。ただ、よく神をいただく人間には精神錯乱の行動が多い、以前は多かったとされるが、ここではそのような異常行動を示した者は少ない。なかには精神病院に入院する人でも神をいただけで治る者がある（11）と述べる者もあるが、通常はかれらもユタとフリムンには明確な区別を置き、その種の行動にも否定的な態度をとるのである。

ところで憑依現象の発生に個人的・社会的な緊張が深く関わっていることは、既に研究者の常識にもなっている。むしろ個々の症例と危機体験とを何らかの医学モデルに適合させることが目的ではないし、何を心身の不調を引き起こした危機体験とするかの判断も安易にはできない。心身の不調に比べてこれらが各自の宗教世界に引き付けて語られることは少なく、ここでは詳細な生活史の聞き込みが必

表1 訴えられた心身の不調

訴えられた症状	ユタ	カミオガミ	合計
衰弱／痩せ細る （極度の食欲不振）	7 (7)	11 (9)	18 (16)
不特定部分の痛み	5	6	11
全身倦怠	4	6	10
めまい	4	5	9
頭痛	3	6	9
虚脱感	5	3	8
肩凝り	3	5	8
吐き気	2	3	5
動悸	1	2	3
手足の震え、シビレ	1	2	3
意識を失う	1	2	3
月経異常	1	1	2
発疹	1	1	2
喉の異物感	0	2	2
発熱	1	0	1
急に白髪になる	1	0	1
目（瞼）が開かない	0	1	1
胃痙攣	0	1	1
死への不安	3	9	12
ヒステリー／急に泣きわめく ／突然暴れ出す	4 3	3 2	7 5
不眠	4	5	9
不思議な（恐ろしい）夢	4	5	9
強い孤独感	2	7	9
夜（暗闇）が怖い	2	6	8
気が鎮まらない／落ち着かぬ	2	5	7
独り言	4	2	6
往来で奇行を繰り返す	2	0	2
放浪癖	1	0	1

*) 回答は複数回答で、括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

表2 心身の不調以前の危機体験

危機体験	ユタ	カミオガミ	合計
病弱 (持病の後遺症)	6 (1)	9 (2)	15 (3)
夫婦の不仲 (夫の暴力)	2 (0)	5 (3)	7 (3)
家族(夫、子供)の死	2	4	6
離婚	2	3	5
移住に伴う生活環境の変化	2	1	3
家族の(病氣)看病	0	3	3
眼病で急激に視力が落ちる	1	1	2
家族との対立	1	0	1
子供の転出	0	1	1
流産	0	1	1

*) 回答は複数回答で、括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は7名、カミオガミは13名。

表3A 訪れた病院

訪れた病院	ユタ	カミオガミ	合計
内科、または婦人科 (島外の内科、婦人科)	7 (2)	10 (6)	17 (8)
(精神科)	(0)	(3)	(3)
(外科、または皮膚科)	(1)	(1)	(2)
病院には行っていない	0	2	2
不明	1	2	3

*) 括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

表3B 医師の診断¹⁾

医師の診断	ユタ	カミオガミ	合計
内科医、婦人科医 ・病氣(悪い箇所)はない	4	9	13
・わからない	3	1	4
(疲れがたまっているだけ)	(0)	(5)	(5)
精神科医 ・軽いノイローゼ	0	2	2
・自律神経失調	0	1	1
外科的処置	0	1	1

*) 括弧内は上記二項目との複数回答。表中ユタの総数は7名、カミオガミは10名。

1) ユタ・カミオガミの回答による。

要となるが、これには多くの困難を伴う。⁽¹³⁾ここでは、いくつか気がついた点を指摘するにとどめる。

個々の危機体験の内容は生活環境の変化、家族との不和、病弱など様々であるが、総じて家庭内の個人的問題といえる(表2)。全ては単発的な出来事ではなく、一時的な回避はあるにせよ生活の中で断続的に本人達に降り掛かっている。これらは誰もが遭遇しうる問題でこれらだけに特有な出来事ではないが、心身の不調が重なることでより大きな葛藤を抱えて一層の悪循環へと陥っている。こうして、かれらは問題の解決を依頼する専門家へと向かう。

心身の不調を抱えたかれらは、まず内科や婦人科の医師に依存している(表3)。しかし「病氣(悪いところ)はない・原因はわからない」とされ、満足のゆく解決が得られぬまま複数の病院を渡り歩く。島内や名瀬の医療施設だけでなく東京や大阪など遠方の大病院にまで足を運んだ者も多い。医師を訪れなかった者も二例あるが、事例二四は地域の産婆に相談したほか「当時は立派な病院には遠くへ行けなかった」、事例一四は過去に同様の病苦で病院を訪れた際に十分な結果が得られなかったので最初からユタに依存したといひ、近代医療への指向が全くなかったわけではない。また精神科を訪れた者は三例と少なく、どれも内科や婦人科の診察の後に訪れている。各々軽いノイローゼ、

自律神経失調と診断され向精神薬を処方されたが治らない、納得できないとしてユタを訪れた。このほか精神科医の診察を勧められたり間接的に相談をした者もあるが、そこに依存した者はない。このことから、精神医療の枠で扱われることが期待されぬ事柄であると推察されよう。

こうした手段を講じても問題が解決しないと、この頃から本人や周囲の者は「これは医者でも治らないのだから神様の何かではないか」と考えるようになり、既存のユタやその他の宗教職能者を訪れる。この時期のユタとの接触は本人の意思によるだけでなく、周囲の者が積極的に導いたり本人を抜きに行われることもある(表4)。これは医者やユタを訪れる理由の中に、病者の地位を確定してしかなるべき対処に向かわせる必要が周囲の者にもあるからであろう。正当な理由もなく社会生活から引下がることは許されておらず、こうした社会的認定を与える権威としても医師やユタが機能しているのである。医師と宗教職能者の共存や相補的關係についての指摘は多く、⁽¹⁴⁾喜界でも心身の不調でユタを訪れる一般の依頼者の中には医師と並行して、あるいはどの医者が良いかなどと相談する者もある。しかし基本的にはユタへの依存は二次的な、最終的な手段である。心身の不調に対して、人々はそれがまず医学的な疾患であることを期待して行動する。そして効果が得られぬと

表4 心身の不調時のカミサマ（ユタ）との接触

最初の接触時の状況	ユタ	カミオガミ	合計
一人でユタの家に行った （知人のカミオガミの紹介）	4 (0)	6 (4)	10 (4)
家族がユタを自宅に呼んだ （知人のカミオガミの紹介）	2 (0)	3 (2)	5 (2)
家族がユタの家に行った	2	1	3
自宅にユタが勝手に来た	0	2	2
家族と共にユタの家に行った	0	1	1
不明	0	1	1

*）括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

表5 心身の不調以前のカミサマ（ユタ）との接触

以前のユタとの接触	ユタ	カミオガミ	合計
病気・子供等の相談でよく行った	3	3	6
病気子供等の相談でたまに行った （若い頃からカミシリを示唆されていた）	2 (4)	2 (2)	4 (6)
（訪れたときカミシリを示唆された ¹⁾ ）	(0)	(1)	(4)
（十八夜様、二十三夜様を拜む）	(2)	(2)	(1)
（親戚にユタがいた）	(1)	(0)	(1)
特になし	3	9	12
（他宗教との接触）	(0)	(3)	(3)
（全く信じていなかった）	(1)	(2)	(3)
（親戚にユタがいた）	(1)	(0)	(1)

*）上段括弧内は上記二項目との、下段括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

1) 子供の病気の相談で訪れた。

きにはじめて、宗教世界とのつながりが予想されるのである。

2 宗教世界との接触

事例では心身の不調を抱える前から特定の神の召命（カミシリ）¹⁵⁾を意識していた者もある。事例一・二は病院に行っても回復せず健康祈願の神社参拝時に神がかったので自分はカミシリだと観念して、ユタには確認の判断（ハンジ）を受けただけだという。いずれも病弱だった幼少時より神をいただく可能性があることを複数のユタから指摘されており、これが自己診断の裏付けになったという。また他者の指導を受けていないとする事例四も神社参拝時に神がかったので自ら悟ったというが、

幼少時よりユタから神とのつながりを指摘されていたほか、心身の不調を抱えた大阪在住当時に地域の宗教職能者から同様の示唆を受けていた。医師の診察を受けずにユタを訪れた事例一四も過去に同様の示唆をユタから受けていたという。

このように以前から宗教世界と接触してこのような認識を持っていることが、病者をユタへと方向付け、依存を早めさせるのかもしれない。こうした過去の経験が守護神獲得上の大きな誘因になるという指摘もある¹⁷⁾。しかしかれらが語る過去の神秘体験の多くは現在から過去に遡って解釈、再構成されたものであり、全てが影響するとはいえない。心身の不調がなければ、現代医療から疎外されなければ、過去の神秘体験はそれ以上の意味を持たなかったであろう。また皆が以前より宗教世界を強く意識していたのではなく、一般の依頼者と同様の相談でユタを訪れたことがある程度で、特に意識していなかったという者が多いのである（表5）。個人差があり一般化は難しいが過去の神秘体験の評価には慎重でありたい。

ところで病苦を抱えてユタを訪れる依頼者がはじめに予想するハンジは神の召命ではなく、通常は祖霊や死霊からのシラセ・サワリ、ウンキの問題と¹⁸⁾とされることである。ここでは祖霊や死霊の要求に従った依頼者本人の行動やユタ

による祈禱や祓いの儀礼、あるいは生活を質素に改めることが要求される。ハンジが組み合わさることも多いが、いずれにせよ宗教世界との関係を本人が直接、あるいはユタを介して修復することで問題が解決される。基本的に依頼者とユタ及び宗教世界との関係は問題ごとに完結して継続しない。これに対して守護神獲得の要請は否応なく神との関係を生涯継続するのであり、そこに問題の特殊性がある。神をいただく者の中にも最初はこのハンジを受けた者がある。事例一九はあるユタにウンキの問題とされ祈禱を受けたが回復せず、さらに数名のユタの判断や祈禱を受けた。事例二〇はユタ（事例七）にウンキの問題とされて病院に行くことを勧められた。七年後に同じユタからカミシリとされるまで数々の病院やカミサマを渡り歩いている。事例二五もユタ（事例四）に死霊の祟りとされて祓いの儀礼を受けたが回復せず、名瀬市の病院と数名のユタを訪れている。いずれもユタのハンジに従ったのに問題が解決せず、最後にカミシリに至る。

ハンジの変更に關するかれらの説明は、カミゴトを嫌っていたので神様が気をつかって明確に示さなかった（事例二〇）、ユタとの相性が悪かった（事例一九・二五）である。これは当初は不感からユタの呪術儀礼にも反応しなかったが、その後の状況の進展がそうならざるを得ない状況に

表6 カミゴトへの周囲の態度

周囲の態度	ユタ	カミオガミ	合計
親戚の強い反対 (神を抜く) (延期願ひ)	1 (1) (0)	2 (0) (1)	3 (1) (2)
病気だから仕方がない (治るなら良い) (ユタにはなるな)	3 (2) (1)	8 (3) (5)	11 (5) (6)
特になし 不 明	1 3	4 0	5 3

*) 括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

追込んでいったとできるかもしれない。病因為特定されず解決を見ないので病者はより不安定な状態におかれ、家族の中で化を招いていった。そして他はや他に頼る世界がなかったのである。

せす神道系の宗教に入信した。一時的には回復して生活も元に戻ったが、同じ症状が再発したためユタへ事例二を訪れた。事例一五も病苦を抱えてユタをはじめとした多くのカミサマを訪れ、結局仏教系の宗教職能者に相談して入信した。しかし小康状態が続いた後に再び悪化したので名瀬市内のユタを訪れ指導を依頼した。この二例はいずれも当初は「迷信的で劣等なユタには抵抗があり、きちんとした宗教の方が信頼できる」として既成の宗教に依存した。このように、かれらのユタに対する評価は必ずしも高かったわけではない。しかし問題が解決しないために結果的にユタに行きつく。「自分の正しい守護神をいただかなかったために治らなかった」のである。

— 44 —

とって延期願ひをしたが、二年後に再発したので神をいただいた。事例二二は延期願ひをした後も何度かカミゴトを意識させられたが夫の強い反対があつてできなかった。そして夫の死亡後（この頃は看病が大変で体調も良くなかった）に自分の守護神をいただいた。

たしかにカミシリの確認によって病氣の原因を知り、回復への対応を与えられたことになる。しかしカミノミチに就くことは一時的な対処ではない。神々は普通の生活に嫌いな事物が多いとされてそれらへの接触は本人の心身の不調となって表れる。家族を通して間接接触も問題にされ、生活の不便さは周囲の者にも及ぶ。病者の体調が元に戻っても「普通の人間」には一生戻れないのであり、日常生活が元通りになる保証もない。カミゴトは歳老いた女性がやるもの、カミゴトに就くとフリムンになるという先入観は強く、これを遺伝的資質による精神病の一種とみなして忌避の対象とするという話も聞かれる。近代合理主義の影響から神様（カミサマ）などは迷信・邪信の類と断言する者は多数派である。得体の知れぬ宗教世界に対する漠然とした恐怖だけでなく、一般にはカミゴトに対する否定的な考えが強く存在する。こうした社会一般の見方に対峙しながら、このような人物を家族が抱えてゆくことは容易なことではない。こうした背景が、かれらや家族をして「カミゴトは

仕方なくやっているのだ」と述べさせているのである。

3 修業期の展開⁽¹⁹⁾

カミシリは既存のユタに宣告され、他者の指導を受けぬ者もユタや類似の宗教職能者から同様の示唆を受けているが、一定の症状を示す者への一様な回答としてあるのではない。ユタは「神様がそうおっしゃった・診ればわかる」と答えるだけだが、本人を診ずに訪れた家族の者にその可能性を告げることさえある。むしろ患者を取り巻く状況から回答を導くものかもしれない。

ユタを訪れる前にいわゆる神がかりを示した者は三例と少なく、これがカミシリに判断に直接に影響を与えているとはいえない。むしろこれがなければ守護神の獲得はできず、かれらの地位確定の上では重要事項となる。しかしこれは本人がカミシリを強く意識するか、カミノミチに就く決意を固めてから表れている方が多い。過去の異常行動を神がかりと説明する者もあるが、その多くは成巫後に解釈したものではじめから全ての説明できぬ行為を神がかりとするのではない。

最初の神がかりの状況は先の三例においても神社の中、他はいずれもユタとの接触に際して、その儀礼に感応してというように宗教世界と強く結び付いた設定が表れる（表

表7 a 最初の神がかりの場所

最初の神がかり／場所	ユ	タ	カミオガミ	合 計
ユタの家（訪れたとき）		2	8	10
神 社 の 境 内		3	0	3
自宅（ユタを家に呼んだとき）		1	2	3
不 明		2	4	6

*) 表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

表7 b 最初の神がかりの場面

最初の神がかり／場 面	ユ	タ	カミオガミ	合 計
精神集中して神を拜んでいるとき		5	2	7
ユタの太鼓の音に感応して		1	2	3
ユタを見てすぐに		0	2	2
ユタの儀礼の最中に		0	4	4
不 明		2	4	6

*) 表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

表7 c 最初の神がかりの状態・行動

最初の神がかり／状態・行動	ユ	タ	カミオガミ	合 計
両手を上げて（立ち上がって）踊る		4	7	11
体を前後に激しく振る		3	3	6
正座した状態で飛び跳ねる		1	2	3
オヤサマに縋り付いた		0	2	2
神の声が聞こえた		1	0	1
目の周囲が熱くなる		1	0	1

*) 回答は複数回答。表中ユタの総数は6名、カミオガミは10名。

表8 オヤサマの選択理由

オヤサマの選択理由	ユ	タ	カミオガミ	合 計
カミシリを宣告された		3	5	8
知 人 の 紹 介		1	7	8
（ユタ、カミオガミの紹介）		(0)	(7)	(7)
そこで最初に神がかった		3	3	6
家 が 近 い		1	5	6
相性が良かった／気があった		2	1	3
ユタの方から言ってきた		0	2	2
不 明		1	2	3

*) 回答は複数回答。括弧内は上記項目との総数回答。表中ユタの総数は6名、カミオガミは14名。

7)。この神がかりとは身体が不随意の状態に置かれ、自分の意思とは無関係に「神によって」動かされるような状態をいう。その行動には類似したものもあり、波平（一九八四 一六一―一六三）はこれにはいくつかの文化的な型があることが予想されるとしている⁽²⁰⁾。ただし特定の行動に一樣の説明体系が対応し、常に一定の解答が与えられるわけではない。

一口に神がかりといっても激しく身体を動かすものから瞑想のようなものまで様々で、外見的なものから観察者が判断を下せるとは限らない。事例八は「最初は神がつくとはどういうことか分からず、気違いになるのではと心配だった。オヤサマにいわれて一生懸命拜むが何も起こらない。しかし二時間ほどして急に目のあたりが熱くなり、赤い帯のようなものが見えてきた。オヤサマに尋ねると、おまえの神が降りてきたのだといわれた。変な感じだったが終わってみると何となくすっきりした。それから自分一人で神が降りるのが分かるようになった。守護神が違うので自分は身体を動かしたりはしない」と述べている。同様に事例三をはじめ多くの者が神がかりでも激しく身体を揺すられたりすることはないとする⁽²²⁾。

また事例一七・二〇・二一・二四・二五等はオヤサマの儀礼時の太鼓の音に感応して踊ったり上体を前後に揺する

不随意の行動を示し、オヤサマは神がかりとした。しかし本人達はそのときの神との一体感などは強く意識しておらず「オヤサマに踊らされた」と述べ、日頃このような経験を持たないという。つまり神がかりの認定はかなりの部分を既存のユタの判断に依っており、個々が感ずる不随意性のほかに行動型や場所、時間といった脈絡の中から回答が引き出されているといえよう。

こうして神がかりが確認されると速やかにこれを受け止めるなければならない。心身の変化や何らかの行動を神がかりとされ、本人の主観的世界に宗教的意味づけが定着するとユタへの依存は決定的となる。そして多くの者は決意を固めて既存のユタにミチアケまでの指導を依頼する。オヤサマの選択は基本的に弟子ユタに委ねられるが（表8）、人に神を与えると自分が死ぬ（事例四・六）、エキガミなのでオヤには立てない（事例三）といった依頼を拒んだり、経験者が依頼を断り他のユタを紹介することもある。弟子を持つユタは他人の命を預かるので緊張するだけでなく、弟子へのシラセが自分にくることが多いので疲れると述べ、一般にオヤに立つことを嫌うことが多い。

しかし事例七のようにオヤに立てというシラセがあったとして、積極的に弟子を巻き込んでゆくこともある。人間と同様に神にも相性があってそれが合わないオヤには立

表9 守護神の決定理由

守護神の決定理由	ユタ	カミオガミ	合計
オヤサマから言われた	5	15	20
自分で決めた／神のシラセ	6	3	9
（オヤサマの確認を受けた）	(3)	(3)	(6)
（ヒトダスケの前に）	(4)	(0)	(4)
不明	4	1	5

*) 回答は複数回答で、括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は8名。カミオガミは14名。

表10 修業期のオヤサマ訪問の理由

訪問の理由	ユタ	カミオガミ	合計
体の痛み	3	13	16
（働けない）	(2)	(2)	(4)
（頭痛、吐き気）	(0)	(3)	(3)
（口内のただれ）	(0)	(2)	(2)
（下痢）	(0)	(1)	(1)
一人で寂しいので	2	7	9
不安	3	6	9
（家族の病気等）	(0)	(3)	(3)
シラセの解釈の確認	3	5	8
カミゴトについての質問	3	5	8
恐ろしい夢	1	2	3

*) 回答は複数回答で、括弧内は上記項目との複数回答。表中ユタの総数は5名、カミオガミは14名。

てない、オヤサマは自分と同様の病気を抱えた人が良い（多い）（事例一・七・一二・一四・一九・二二）という。同様の病気を克服した者が病者を正しく回復へと導くというのである。事例七をオヤサマとする事例群では訴えた症状に類似点もあり、自分達は同じ病気で苦しんだと述べる。オヤサマと弟子ユタの関係を把握した上で各々の症状を見てゆくことが、治療者と病者の関係に新たな事実を発見しうるかもしれない。しかし全てが同じでもなく、このような類似性は他のユタ・カミオガミの間にも見て取れる。むしろここで重要なのは症状の類似ではなく、後で述べる病者の置かれた状況の類似ではないだろうか。

ところでこれらに加護を与えて健康を維持する守護神はオヤサマによって示され、本人に直接シラセがあったとする者でも殆どがその確認を

オヤサマに受けている（表9）。個々の神々の性格を明確に意識している者は少なく、そのような質問に言葉を詰まらせる者も多い。しかし各々に様々な固有な名詞がつけられて個人に対応したものとなっていることは注目される。種々の儀礼は同様のものを行っても、守護神を中心とした個々の宗教世界は個別的なものとして展開する。カミゴトで他の者との差異を言及された場合でも本人に正当性を与えることができるのである。

さてカミゴトを始めるとこれらの病状は劇的に快方へと向かい始める。とはいえカミゴトを始めて間もなくは不安定な体調と様々な問題を抱えては日常生活を休み、その対応に憂慮して頻繁にオヤサマを訪れる（表10）。そしてその都度に問題を神のシラセとして宗教世界に結び付ける作業を、先輩ユタの解釈を受け入れながら修得してゆく。また他者の指導を受けぬ者や依存の程度の低い者はトランス時の経験を守護神と結び付け、それと「語り合っ」て一体感を獲得することで、自身の世界を築いてゆくのだといえる。

むしろ問題の全てが守護神のシラセではなく、なかなか正しい神がつかずミチアケまで苦労したり（事例一二）、余計な神が邪魔をする（事例一・四・二五）こともある。間違った神がつくと病気は治らず気違いになる、はじめのうちは間違った神や悪い神が現れることが多いという。こ

うしてカミゴトをはじめても存続する痛みや正しい神がかりとされぬ行動に意味づけをしてゆく。この間はオヤサマに助けてもらったり（事例一・六・七・一〇・一五・二五）他、一人で邪悪な神々と戦う（事例一・三・四・八）。ユタやカミオガミとして周囲が容認するような言動を身に付けているともいえよう。

ここでは具体的な問題と解釈の対応は判然としないが、おそらくは一つの問題に一つの説明といった因果律は存在しない。これらの解釈は個々の状況に対応したものとして、オヤサマと弟子ユタのやりとりの中で創られてゆくからである。それは弟子ユタの抱える様々な異常を解釈するだけではない。弟子ユタの守護神がオヤサマにもシラセを出すので身体と同じ箇所が痛くなる（事例一・七）というように、不安定な状態の弟子をめぐるオヤサマの問題までもが引き付けて解釈される。痛みを抱えた者の共感的な連帯の中で、互いの物語を創り合う。そして本人達に好ましくない出来事や心身の異常に意味づけを行い、社会生活から引下がることに正当な理由を与え、社会の批判から身を守ってゆく。

そして次第に他者への依存が弱まると独立する。これは個別性が強く主張される程に、自分と他者の世界が相容れないものになることを示している。オヤサマを持たぬ者な

どは、他者を「習いユタ⁽²⁵⁾」と見下して自身の宗教的能力の優位性を強調することが多い。かれらは既存の權威に頼ることなく自身の宗教世界を構築せねばならず、その独善性を強く主張しなければ社会的承認を得るのは難しい。こうしてかれらの中にカミノミチは人それぞれとする個別的な世界が築かれてゆくのである。

三、成巫後の状況

1 その後の病状

かれらの殆どは病氣はシラセだったので神をいただいたらずぐに治ったという。当初の病苦が今も続き、神をいただいても少しも良くならないとしたのは二名しかない⁽²⁶⁾。しかし問い質してゆくと、日常生活も儘ならぬ状況からは一ヶ月で回復しているものの、病状が落ち着いて心身の不調を意識しなくなるまでにはかなりの時間を要している（表11）。また問題の全てが消失したわけではなく、再び心身の不調や不安を抱えながら生活している。

むしろ普通の病氣のときは通常の医療施設に解決を任せるが、頭痛や肩凝りなどのカミシリに似た症状はシラセと解釈される。事例一八は結婚後の数年間安定した生活を送

っていたが再び絶食状態となり衰弱した。カミゴトを疎かにしたためだと考えて態度を改めたら治ったという。つまり過去に医師に否定された問題や主観的尺度に基づく痛みと症状については自らの手で解決の糸口を捜し出すのである。ただし全てがこれを独力ではなく、オヤサマや他のユタの判断を仰いだり自身の解釈の確認を受けに行く者は多い。成巫後の一時期ユタゴト（呪術行為）をしていた事例一二が、再び頭痛やめまいが続いたときにオヤサマからヒトダスケをしてはいけないとされて止めたように、ヒトダスケを始めてからも他のユタを訪れることもある⁽²⁷⁾。

このほか肉を食べたから口の中がただれ、墓場に行ったから足が痛くなるというように様々な不調が神の不浄とする事物に接触したためとされる。このような論理は葬式から戻った家族が身体を清めずに家に入ったから頭が痛くなる、肉を切った包丁をよく洗わずに使って調理したものを食べさせたので下痢をしたというように、周囲の者へも向けられる。これらは自分の宗教的地位を他者に認めさせるための戦略とみなすこともできよう。このような場合、かれらの抱える異常は家族に責任がある。これを認めて態度を改めぬ限りかれらの不調は続くのであり、周囲の者は少なくとも表面上かれらの論理を肯定しなければならぬ。また病氣が治ったという事実は説得力のある証明として、

表11 当初の心身の札調から回復までの期間

回復までの 期 間	ユ タ		カミオガミ		合 計	
	I	II	I	II	I	II
～1カ月	2	1	1	1	3	2
～3カ月	3	0	3	0	6	0
～6カ月	0	1	6	1	6	2
～1年	1	0	2	5	3	5
～2年	1	3	0	4	1	7
～3年	0	0	0	1	0	1
～5年	0	1	0	0	0	1
～現在	1	2	0	0	1	2

*) I は初期の重症状態から通常の生活に戻るまで、II は当初の心身の不調そのものを、殆ど意識しなくなるまでの期間。表中ユタの総数は8名、カミオガミは12名。

表12 最初の依頼者の来訪時期

依頼者の来訪時期	ユ	タ	カミオガミ	合	計
ミチアケした直後		2	0		2
～3カ月		1	0		1
～1年		1	1		2
～2年		0	1		1
～3年		2	0		2
3年～		1	0		1
時期不明	1		3		4
なし	0		9		9

*) 明確に最初の依頼者の来訪を記憶する者は少なく、ある程度頻繁になってヒトダスケを意識するようになった時期の者が含まれる。表中ユタの総数は8名、カミオガミは14名。

周囲の者にかれらの解釈や地位を受け入れさせることにもなる。

このように自己に何かの異変が生じる度にかれらは神の世界を意識し、物語を創り強化する。修業期にしたように、日常生活への不適応の理由を神に求めて自己を正当化する。このような物語化が実際に生理学的な次元で病状の安定を齎すかは今後の研究を待たねばなるまい。しかしここで重要なのは神をいたしたこと、病氣が治った、これらは病氣ではなく神のシラセだったと確信されてゆくことである。問題を一つ克服することにかれらの宗教世界が確認され、守護神への信頼が強化されるのである。

2 異能者としてのユタ

ここまでの過程はあくまでも病苦からの脱出が目的で、ユタとカミオガミの間に目立った違いはない。しかしこの中からユタとして社会的役割を担ってゆく者が登場する。

喜界ではユタを訪れる客は人気のある者でも月に二〇人あれば多く、普段は一〇人も来ないという。⁽²⁹⁾どのユタにも商売気はなく年金や家族の援助で生活しているのであり、経済的理由から職能者になるとは思われない。ヒトダスケの動機は皆、押し掛けてくる客を断れなかったのだという。ユタ・カミオガミの家に目印はなく、積極的に捜さぬ限り外来者にはわからない。ある意味では、問題を抱えた依頼者の来訪がかれらを宗教世界に縛り付けているといえる。

しかし本当は助けねばならぬ客を断つたので神に身体を痛くされたと訴えるユタは多い。事例一・二・七は「最初の客を断つたために苦労した（罰せられた）。また客を寄せがかった」と言う。その後も客が来る数日前から神様が寝かせてくれない（不安で眠れない）（事例六）、畑に出ようとすると神様が「行くな」と言い（事例一）、袖を織っている神様が頭を痛くする（事例二・四・七）というように客が来る前にはいつもシラセがあるという。ユタが寝込んでいるときに訪れると病気ではなくシラセだといって

強硬な反対を受けたように、ユタは決して社会的に好まれていない。親類にユタがいることが結婚時に問題とされることもある。一応ユタはフリムンと区別されるがこれに近い存在とされており、家族と離れて暮らすユタもある。ユタは社会的場面に神に近い異能者として登場して特殊な世界を主張するため存在が明白となる。病気が治って生活が元に戻るなら神をいただくのは構わぬがユタにはなるな、と釘をさされた者は多い。ユタの存在が家族の社会的体裁を落としめ、新たな問題を生みうる。ユタが過去の異常行動を宗教的に解釈してフリムンではないと強調することが、このような葛藤の存在を表している。そのため神に依存することを公には伏せることで依頼者の来訪を未然に防ぐのである。

ユタがユタである程独善性が強く主張されるために日常生活に支障を来し易く、それがフリムンとの同一視につながる。そしてこの態度は自分はあるのではないとするカミオガミの言及にも表れる。宗教生活における優秀性は認めつつも、日常生活での適応の度合いは低いことを強調する。カミオガミは日常生活を優先してカミゴトを最小限にとどめる。自己の主観的世界の主張を控えて、あるいはそこへの埋没を恐れて社会的に少しでも当たり前であろうとしているのである。

祭壇に向かう。つまりユタは自己の心身の変化を客の来訪に結び付ける。⁽³⁰⁾ヒトダスケを始めた時期をみても（表12）当初の心身の不調から必ずしも回復しておらず、かれらが問題を持ち続けていることが要因かもしれない。そのため平穩無事なときの来訪者はその後のかれらの解釈を彩るにせよ、商売への執着がないと煩わしいものにしかない。このときユタは今日はシラセがない、もう客は取れないとして依頼を断るのである。

ただし依頼者の要請を断固として受け入れないカミオガミも、その後の心身の不調は抱えており、これだけがユタ化を促す要因ではない。むしろユタとして活躍するには、自己の独善的な世界を相手に納得させるものとして提示し、実際の対処として依頼者の問題の消散に寄与せねばならない。相手の問題を見抜いて抽象的に描き出す能力と、自己の解釈に対する強固な自信が必要となる。依頼者と自分の痛みを重ね合わせることで両者の間に共感的世界を構築し、個々の問題を宗教世界と整合させ物語る能力の有無が問われる。しかしこれは依頼者とのやりとりの中で養われるものでもある。カミオガミは最初から公的場面に登場しようとはしないのである。

このカミオガミの姿勢にはユタに対する低い社会的評価が影響しているのではないだろうか。入巫にあたり周囲の

四、結 論

医学のような科学的解釈とユタが展開する宗教的解釈の比較では、因果関係の推察過程の差異が問われる。むしろある状態を示す病者には特定の対処が効果を齎すという経験的知識に裏打ちされ、何らかの外因的要素がなければ基本的に人間は通常の生活を支障なく送れると考える点では共通する。これを脅かすものとして近代医学では病原菌、宗教論理では神霊といったものが想定され、これらに無力な存在として病者を描くことでその無責任化を果たすのである。

前者においては人間を一定の刺激には一定の反応を示す機械に例えて、症状から病原の種類を問う。対応する対処法を持った疾患の中に病状を位置づけるのであり、これを一律の尺度で測定し類別することが必要となる。そのためはじめから患者と病状や病原の個別差には関心が向けられず、因果の判らない症状は新たに普遍的な症候群として体系化されぬ限りは排除される。むしろ、このような病原論的視点が近代医学の導入まで地域になかったのではなく、伝統的医療の様々な対処療法や薬草の知識の中には近いも

のもある。むしろ測定技術の向上がこれらに説得力を与え強化したことで、近代医療が取って代わったとする方が正しいのであろう。

一方ユタの治療では訴えられた個々の状況をまず事実と認めて、個人が苦しんでいるという主観的経験に共感することから対処が始まる。ある要因に対して人間は様々な反応を示しうるといふ個別性が強調され、ある対処が同じ効果を齎さなくとも構わない。むしろ共感の源には人間の共通性が前提にあり、症状や病気の種類が全く言及されないのでもない。しかしそこに生まれる物語は個人の状況に対応したもので他者の客観的検証を可能（必要）とせず、個々の症状や病名はこれらの装飾に過ぎなくなる。

これまで見てきたように、ユタやカミオガミが訴える主観的で一定しない症状には近代医学の尺度は適用しにくく、このとき専門家である医師は対応を失う。しかし近代医学が権威的であるために主観的な病感の排除され、これを主張する個人の人間性までもが否定される危機を迎える。ここでは客観的な症状から病気（疾患）が構成されるのである、これを保持せぬ者は病人（患者）とされない。かれらは病気もないのに社会から逃避しているとされ、こうした病者への保護は確立しにくい。また社会の否定的見解が精神医療に向かうことを阻む。精神病者は通常の人間（ある

いは大人）が持つべき理性を失った者、通常耐え得るべき問題に耐えられぬ落伍者・欠陥者とされて責任が本人やその周囲に転嫁されるからである。

人間は病感を覚えると、その克服を目的に様々な方策を段階的に探り遂行することを繰り返す。そして最終的に当初の目的が達成されたときに行動を終了する。客観的な弁明を与えられずに無責任化を果たせない者にとって、それを社会的に容認される次元で図るユタの治療は魅力的である。今まで無視され続けてきた自己の痛みに、はじめて他者と共通の見解を獲得する。自己の個別的な痛みの正当性社会から逃避していたことへの弁明を宗教論理によって物語ることで獲得する。当初の目的である苦痛からの解放が、宗教的解釈による不調の意味づけとそれによる地位安定の中で達成されるのである。

しかし宗教世界への依存はある意味では問題を終結させない。その後の痛みやトランス時の経験を神に結び付けるために、生涯その世界に住まわされることになる。次々に起こる問題への対応は、これを永劫の螺旋として展開させる。これを断ち切るにはこれまでの説明の全てを他のものに置き換えるしかない。実際に心身の安定が図られると社会のユタへの否定的見解がこれを促進する。宗教世界への執着が薄れることで、自分は普通の人より少しばかり信心

深いだけで今はあまりやっていないと述べる者も少なくない。むしろ問題が生じれば再びここへ引き戻されるか、転嫁の対象を捜さねばならない。事例二一は当時は受け入れなかった精神科医の診断を認めて「自分は本当は軽いノイローゼで、神様に行った時期に偶然治っただけだ。今も毎日拜んではいるが一種の気休めだ」と言う。そして宗教的解釈との不整合については、オヤサマとの間に実は娘の問題だったという了解を作って両者の立場を保護する。⁽³¹⁾

かれらにとって神は自己に安定を与えるのと同時にそれを揺り動かす畏敬の対象である。「歳をとるごとに落ち着いて周囲の事物へのこだわりがなくなる」「神様の嫌いな物が減ってくる」と言うように、自己の痛みに対して鋭敏でなくなるとして生活が安定すると神への依存は弱まる。こうなるとユタとしては終焉を迎えるかもしれない。しかしこれまでの自己の正当性を保持するためにはカミゴトを続けねばならないのである。

心身の不調を抱えた個人が苦痛に堪えて日常生活を送るのか、これを訴えて社会から逃避するのにかによって問題の扱いは変わる。病気が単なる個人の問題でなく、それが訴えられることで周囲の人間も巻き込んだ社会的問題となることは触れるまでもない。不調を訴えて役割を拒否することとは周囲の者にとって期待する労働力を失うだけでなく、

看病などの新たな緊張や危機を迎える。病人という社会的地位を与えることは役割をある期間免除して復帰を待ち、逸脱を正当化して病者の責任を消散する機能がある。喜界では女性にも農作業や紬織りなど多くの労働を期待しており、経済的損失は小さくはない。そのことが病者だけでなく周囲の者をも専門家へと向かわせる。

心身の不調を訴えた者に社会が用意するラベルは限られており、人々が予想し期待する順に医学的疾患を患った者、神霊からのシラセとしての病いを受けた者、回復の見込みのない狂気を抱えた者と分類できる。医師によって第一の可能性を否定されることで、現実の苦痛と社会的な認定の間の大きな溝が浮かび上がる。

入巫前の危機体験や心身の不調をはじめ、過去の好ましくない事件や不思議な出来事は自身の地位が普通の人間から神に仕える特別な人間に転換したという脈絡の中で語られる。極度の食欲不振や衰弱は一度骨と皮だけになって過去の生活で染み付いた不浄なものを捨て去るのであり、神の嫌う物を食べたため吐き気や頭痛が起き、神の意志に従わないので病気や苦勞が絶えない、これは神が与えた試練だと説明する。これらは過去の出来事の宗教的再解釈にすぎないが、説明し語り続けることが問題が解決されずに蓄積され、大きな葛藤を生んでいたことを表しているのかも

しれない。

こうして自らの過去を再構成し物語することは、宗教的地位に至った必然性を説いて正当化を続ける営みである。これはユタ・カミオガミという宗教的人物が常に負の異常性を付与され非難されることに對し、人間は神の前では無力な存在で、そこに捉えられた者に何ら責任はないとして一杯の抵抗をしているともいえる。絶え間なくカミゴトを続けることは単なる気休めではなく、将来の心身の不調や内面的な葛藤を投影する世界としても常に保持してゆかねばならない。

かれらは神に選ばれたことを主張し、その使命を負うことで自己の主観的世界の一部を具現する。家族や周囲の者だけでなくユタやカミオガミの間にも強固な他者性を築き上げ、自己の世界への侵犯を規制する。周囲の者も自分とは異なる主観的世界と気紛れな病気を訴える人物を、普通の人間とは異なる「神をいただいた人」とすることで距離を置き、かれらの主張を否定せずに付き合うことでそれ以上の関係の悪化を防いでいる。かれらは常に独りで守護神と対峙する孤高の人である。そこでの孤独は自身の守護神からの加護を確信することで癒し、日々の現実の場面へと立ち向かって行く。宗教論理を構築し維持することで様々な他者の存在を認め合い、日常生活のそれ以上の破綻を防

いでいるのである。

おわりに

本稿で取り上げたユタ・カミオガミの成巫時期は昭和初期から五〇年代までに渡っており、この間の社会状況の変化を含めた考察は今後の大きな課題である。また指導者の違いが弟子ユタに与える影響を無視できず、オヤサマと弟子達の関係を詳細に追跡してゆく必要がある。「神がかり」についても脱魂や憑依といった解釈を問題とするのではなく、行動が展開される状況の把握が必要である。そして成巫過程の治療的側面に言及する場合、かれらが壮快感を訴えるトランスの生理科学的解明にも期待が寄せられる。最後に度重なる来訪や無礼な質問に多くの話を聞かせてくれた「神様をいただく方々」、そして調査にあたり筆者を暖かく迎えてくれた喜界島の方々に深く御礼申し上げる。また、励まし御指導下さった青柳真智子先生、佐藤俊先生に感謝の意を表したい。

註

- (1) ユタのシャーマンの性格については佐々木（一九八四）、山下（一九七八）を見よ。

- (2) 神が「憑く」というより「（味方に）付く」の意で用いられる。

- (3) 職能者は通常カミサマと呼ばれるためカミオガミが非職能者を指すことが多いが、基本的には両者を含む概念であるという。しかし守護神との一体感から「単に拝んでいるのではない」として、この名称を嫌う者もある。

- (4) カミサマは神的能力和權威を兼ね備えた人物の総称で呪術宗教職能者一般にも用いられるが、奄美の宗教世界を出自に持つかどうかは区別され、他宗教のカミサマや他地域出身のユタガミは少し変わったカミサマユタガミとされる。

- (5) 双方とも通常敬称のサマあるいはカナシ（神様・カミサマの意）を伴う。一般にユタは蔑称とされ本人達もこの呼称を好まない。またフドゥンはユタの美称ともいわれる。

- (6) エキシヤとも呼ばれるが守護神を持たぬ通常の易者とは区別される。口寄せをしないほかは運勢や災いの原因を占うだけでなく祈禱や治療儀礼を行うこともあり、ユタガミとの目立った差異は見られない。

- (7) ユタの語を知らぬ人も少なくない。またユタと同様の成巫過程を持ち、周囲もユタとしている職能者の中には、守護神の宗教的性格から自分はユタではないと主張する者もある。

- (8) 南西諸島の類似的呪術宗教職能者の名称はユタに限らないが、これまで十分な検討もないままにユタの語が総称とされてきた。佐々木（一九八四・二〇五）は細分化したフォーク・チームで呼び分ける煩雑さを避けるために、改めてこの地域で比較的広く使われているユタの語で代表させようと提案している。喜界にはユタガミとエキガミを総称するフォーク

・チームはカミサマのほかになく、ここでは両者の差異について言及しないのでユタの語を用いる。

- (9) 一九八五年度国勢調査による。

- (10) 事例一〇はユタ、事例一一・二五はカミオガミで、事例二は一九八六年一月、事例一一は同年五月に死去した。事例五、二三 は記録が殆どとれず、事例九は面接できなかった。

- (11) フリムンとは狂人・気違いの意。フリムンは社会関係を遮断、疎外され、その家族も婚姻対象から忌避されるなどの不利益を被る。フリムンを隔離施設に収容して社会から排除するようになったのは最近で、昭和中期にも地域の中に住んでいたという。精神医療や隔離施設の普及に伴う狂気観の変化は予想され、あわせてユタとして信仰の世界に獲り込まれる人々の性格が変化している可能性も考えられよう。

- (12) ルイス（一九八五）、佐々木（一九八三、一九八四）を見よ。大橋（一九八〇）は沖繩のユタを事例に、危機場面に陥りその打開に失敗した個人が極度のストレス状態で心身の不調をきたすと述べている。

- (13) 質問が個人のプライバシーに触れると拒否的態度を示す者は多い。ユタの生活史の聞き込みに伴う困難や資料の妥当性については佐々木（一九八四・二〇二・二〇五）を見よ。

- (14) 佐々木（一九八三）、波平（一九八四）を見よ。

- (15) 過去の報告や沖繩の事例では一般にカミダリー、カミザワリとされている。

- (16) この人物の詳細は不明だが、大阪市周辺には奄美・沖繩の出身者が多く、多数のユタ的職能者が現在も活躍している。

- (17) 佐々木（一九八四・二三二）を見よ。

- (18) 問題が超自然的存在の悪意だとサワリ、善意だとシラセと呼ぶ。祖霊は祖先祭祀や日常生活での子孫の過ちの改善を要求する。成仏してない霊や悪霊は鎮魂や祀り直しを要求して祟る。また個人に定められたウンキ「運氣」が悪い時期に無理な（派手な）行動をとると災いが起こるとされる。
- (19) ここではカミゴトを修得してミチアケ（一人立ち）して日常生活に復帰するまでの期間を修業期とした。しかしミチアケの時期は過去に遡って解釈されることが多く、明確に示すことは難しい。
- (20) 神がかりの発現状況の限定性と行動の類似性については、催眠状態の行動への暗示効果といった意識の変容状態への心理学的・生理学的研究が有効な解答を導きだすかもしれない。指導する先輩ユタをオヤサマ・オヤガミサマと呼び、指導することは「手を引く・育てる・オヤをとる・オヤに立つ」などと表現するが、一種の師弟関係で緊張した主従的なものではない。弟子達の横の関係はカミキョウダイと呼び、同時に成巫した者達に友人関係が見られることもあるが、この関係が強調されることはない。
- (22) 実際の儀礼場面では激しい神がかりは殆ど観察されなかった。大橋（一九八〇）によると沖縄のユタの神がかりはベテランのユタほど静かになり、激しいトランスを見せる者よりも信頼されているという。また藤崎（一九八七）は沖縄のユタのトランスにもいくつかの種類があることを指摘し、従来のトランス観の再検討を促している。
- (23) 守護神はその性格から太陽神、神社とその祭神、職能神、祖先神に大別できる。通常は最初についた神がその者の中心
- 的な守護神とされて祭壇中央に祀られ、最初に神がついた日はカミマツリの日（カミオガミとしての誕生日）として、毎年儀礼を執り行う。その後の修業の中で複数の守護神を獲得して祀る者もある。守護神が決定すると供物をのせる盆と衣装などの神具が用意され、一般にこの自分専用の盆を用意（ボンケツ）した時からカミゴト（信仰生活）が始まるとされる。
- (24) オヤサマの指導に従い、あるいは独力で類似した入巫式を行う。ユタの儀礼の詳細は山下（一九七八）を見よ。
- (25) 習いユタとはカミゴトの全てを他者から修得した者を指し、神から直接シラセを受けたテンザシ「天差し」者は生まれユタとされる。しかし自身の主観的経験が神のシラセと解されるので、他者の助力を受けていても全ては守護神と直接結び付く。実際に習いユタを自称する者はなく、これは自己の優越性を主張するレトリックに過ぎないといえる。
- (26) 事例五の詳細は不明。事例一〇は現在も頭痛や全身倦怠に悩まされている。名瀬市在住のオヤサマは修業が足りないとしているが、距離的な問題で煩悩に通って指導を受けることは難しい状況にある。
- (27) 沖縄の事例では成巫後しばらくしてカミダリーの再発にともない他のユタを訪れるユタも報告されている。大橋（一九八〇）、佐々木（一九八四）を見よ。
- (28) ルイス（一九八五）はこのような「憑依わずらい」を社会的に周縁的位置におかれている者の戦略として捉えた。
- (29) 少ない者では年に一〇人の依頼者もないという。一回の謝礼は金銭の場合は千〜二千元、往診時は三〜五千元が相場で、

参考文献

- 大橋英寿 一九七八「沖縄における shaman（ユタ）の生態と機能—ハンジ場面観察による client の事例研究—」『東北大学文学部研究年報』二八
- 一九八〇「沖縄における shaman（ユタ）の成巫過程—社会心理学的接近—」『東北大学文学部研究年報』三〇
- 佐々木宏幹 一九八三『憑霊とシャーマン』東京大学出版会
- 一九八四『シャーマニズムの人類学』弘文堂
- 藤崎康彦 一九八七「沖縄のユタと「トランス」」『南島史学』三〇
- 波平恵美子 一九八四『病氣と治療の文化人類学』海鳴社
- 山下欣一 一九七七『奄美のシャーマニズム』弘文堂
- ルイス、I・M 一九八五（一九七一）『エクスタシーの人類学』法政大学出版

供物では茶、酒、菓子が多い。また親しい者の相談にはこれらを受け取らぬこともある。

- (30) 大橋（一九八〇）は沖縄のユタを事例に、ユタは自身の問題をも客の来訪に投影するのであり、ユタのハンジや儀礼は客とユタ自身の双方の問題を消散しているとした。
- (31) この娘は島外に婚出したが数年前から当地で神様を拜んでいる。当時は娘がまだ幼かったので神様が気をつかって母親にシラセを出したのだという。
- (32) 紬織りは農家の副収入源として高い地位を占めてきた。二五の事例中二〇名が当時から紬を織っており、一カ月に五〜二五万円程の収入になる。

（地理学専攻後期課程在学中）